

西牟田鷺寺東遺跡

福岡県筑後市大字西牟田所在遺跡の調査
筑後市文化財調査報告書
第 84 集

2008
筑後市教育委員会

にし む た わしでらひがし
西牟田鷺寺東遺跡

2008
筑後市教育委員会

序

本書は、平成 19 年度に筑後市教育委員会が発掘調査を行った西牟田鷲寺東遺跡の埋蔵文化財調査報告書であります。

西牟田地区は、古くは中世西牟田氏の城下町、江戸時代には久留米藩の在郷町として栄えてきた地域で、現在でも一部に近世の町並みを見るすることができます。

今回の調査では、中世を中心とした集落周辺の遺跡が確認されました。この調査成果が今後の調査研究に活かされていくことを期待します。また、本書が地域における文化財保護への理解を深める一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、多大なご協力を賜りました関係者の方々に心より御礼申し上げます。

平成 20 年 3 月

筑後市教育委員会
教育長 城戸一男

例言

1. 本書は平成19年度に筑後市教育委員会が行った西牟田鷲寺東遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び出土遺物の整理は筑後市教育委員会が行った。出土遺物、図面、写真等は筑後市教育委員会で収蔵、保管している。発掘調査及び整理作業の関係者は第Ⅰ章に記している。
3. 本書に使用した図面の遺構図は上村英士、吉村由美子が作成し、遺物の実測、浄書は整理委託事業として（財）元興寺文化財研究所 丸山裕見子、仲文恵が行った。
4. 本書に使用した遺構・遺物の写真撮影は上村、吉村が行った。
5. 今回の調査に用いた測量座標は国土調査法第II座標系（日本測地系）を基準としている。
6. 本書に使用した遺構の表示は以下の略号による（筑後市における埋蔵文化財の取り扱いについて：2002に準拠している）。
SD - 溝 SK - 土坑 SP - ピット SX - 不明遺構
7. 本書の編集、執筆は吉村が行った。

目次

I . 調査経過と組織	1
II . 位置と環境	2
III . 調査成果	4
IV . 考察	10

写真図版

I . 調査経過と組織

西牟田鷲寺東遺跡は筑後市大字西牟田字鷲寺東に所在する。宅地造成に伴い、平成 18 年 6 月に開発原因者であるアットホーム（株）より当該地について試掘・確認調査依頼が筑後市教育委員会に提出され、担当課である社会教育課文化スポーツ係が同年 8 月に現地での試掘調査を実施した。試掘調査の結果、遺構が確認され、開発による埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った。当該地については盛土による保存調整が可能であるが、恒久構築物である道路部分について本調査を実施することで合意した。平成 19 年 4 月 3 日から同年 5 月 10 日まで現地での本調査を行い、整理報告書作成作業を平成 20 年 3 月 31 日に完了した。

発掘調査に関わる調査組織は以下のとおりである。

1) 平成 18 年度（事前審査）

総括	教育長	城戸 一男
	教育部長	平野 正道
庶務	社会教育課長	田中 優一
	文化スポーツ係長	北島 鈴美
	文化スポーツ係	永見 秀徳
	(文化財担当職員)	小林 勇作
		上村 英士（事前審査・本調査担当）
		阿比留士朗（～6 月 30 日）

2) 平成 19 年度（調査、報告書作成）

総括	教育長	城戸 一男
	教育部長	平野 正道
	社会教育課長	田中 優一
	文化スポーツ係長	北島 鈴美
	文化スポーツ係	永見 秀徳
	(文化財担当職員)	小林 勇作
		上村 英士（本調査担当）
		吉村由美子（本調査・報告書担当）

3) 発掘調査参加者

地元有志

4) 整理作業参加者

整理作業員 野口 晴香 野間口靖子
(財) 元興寺文化財研究所 横井 理絵 丸山裕見子 仲 文恵 中島 朋子

調査及び整理作業に際しては次の方々にご指導、ご教示を賜った。記して心より感謝申し上げます。(順不同、敬称略)

近澤康二、江島伸彦、神保公久（久留米市文化財保護課）、角南聰一郎（元興寺文化財研究所）、古川順大（九州大学大学院人文科学府）、櫻木智明（九州大学大学院理学府）

II. 位置と環境

1. 地理的環境

筑後市は福岡県の南西部、筑紫平野の中央部に位置する。市域をJR鹿児島本線と国道209号が縦断し、国道442号が横断する。また、市南西部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、灌漑用の溜池が点在する。低位扇状地である東部や、低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域には果樹園や茶畠、東部には米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は国道に沿って市の中心部に形成されている。

今回報告する西牟田鷲寺東遺跡は筑後市の北東部、標高6m程度の低湿地帯に立地する。

2. 歴史的環境

筑後市大字西牟田は旧来三瀬郡に属していたが、戦後の市町村合併に際して農村地帯であった北部が三瀬町（現久留米市三瀬町）に、商工業地帯であった南部が筑後市に分割再編され、昭和32年より現在に至っている。

筑後市の西牟田地区内では弥生時代以前の遺跡は確認されていないが、古墳時代の遺跡としては、溝状遺構が確認された西牟田銭龜遺跡などが挙げられる。古代の律令体制下では班田収受法によって土地が条里に区画されたが、西牟田地区でも字六条、長重などでは、字図上で条里制の名残を見ることができる。

「西牟田村」の地名は鎌倉時代の文献に初見される。この後に西牟田村名主は「西牟田氏」と称して勢力を拡大し、山林の開墾、道路や灌漑用水の整備など開発を進めていった。西牟田氏の出自に関しては二説あり、中閑白藤原道隆の子孫で本姓は宇都宮という西牟田弥次郎家綱入道行西が嘉承年間（1235～1238）に地頭職として伊豆から西牟田に入部し、地名から「西牟田氏」を称したとも、元々三瀬庄内に土着していた在地領主が鎌倉幕府によって本名主として所領を安堵されたものとも云われている。西牟田氏は初代家綱から十三代家周まで約350年に渡って勢力を維持し、西牟田郷内外に城や館を築き、西牟田城周辺は城下町として栄えた。この時期の遺跡としては、西牟田城跡、西牟田上京手遺跡、西牟田寛元寺遺跡、西牟田小次郎丸遺跡など、城館や寺院といった西牟田氏関連の遺跡が多く知られている。

戦国時代には、山本郡の草野氏、下妻郡の溝口氏らとともに「筑後十五将」に数えられた西牟田氏は、菊池、大友、龍造寺氏など様々な大名の旗下に属した。天正年間、十三代家周は肥前龍造寺氏に従ったため大友氏によって西牟田城を破られ、生津城、城島城へと移っていたが、天正14（1586）年には島津氏に敗れ、西牟田氏は肥前に逃れていった。

近世になると西牟田は久留米藩領となり、西牟田城の城下町は在郷町として整備された。この時期の西牟田町は角細工や羽子板など手工業の町であり、文献からは日用品や季節用品が交換されたり売買されたりした様子が見える。現在は角細工などは途絶えているが、町並みには当時の面影が残っている。

字名「鷲寺」の由来となった瑞松山靈鷲寺は、乾元元（1302）年に後二条天皇の勅願によって、西牟田家綱が創建したと伝えられる。後土御門、後柏原、後奈良天皇からも繪旨を賜り、最盛期には西牟田寛元寺、正覚寺など末寺11ヶ寺を有していた。藩政時代には末寺も殆どなくなり靈鷲寺自体も衰退していたため、久留米藩主馬忠頼の養息である伊豫守豊範の松崎分封に伴って三井郡松崎へ移転再興された。西牟田の靈鷲寺跡には、現在も当時の掘削が残されている。



Fig.1 周辺遺跡分布図 (1/5000)

【参考文献】

- 右田乙次郎 1972『筑後市神社仏閣調査書第三集（西牟田篇）』筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
 右田乙次郎 1972『西牟田むらの生いたちの記』筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
 筑後市史編さん委員会編 1998『筑後市史』筑後市
 立石真二 2003『西牟田上京手遺跡』筑後市教育委員会
 阿比留士朗 2006『西牟田寛元寺遺跡』筑後市教育委員会

III. 調査成果

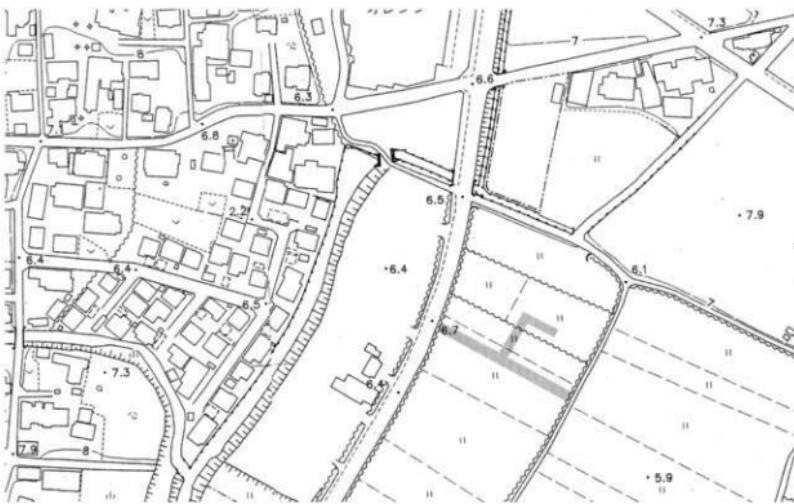


Fig.2 調査地点位置図（1/2500）

(1) はじめに

計画道路部分にあたる 657 m に調査区を設定した。調査は上村と吉村が担当し、平成 19 年 4 月 3 日より開始した。遺構の掘削は表土から遺構面までを(有)徳光建設に委託し、遺構面からは地元作業員による手作業の掘削を行った。空中写真は(有)空中写真企画に委託し、平成 19 年 5 月 10 日に調査を終了した。

(2) 検出遺構

溝

SD1 (Fig.4, Pla.2,3)

調査区西側で検出された溝である。埋土は暗黒色粘質土で、一部に黄白色粘質土が混じる。溝の規模は上面幅 2.3 ~ 3.2 m、底面幅 1.5 ~ 2.8 m、深さ 0.2 m を測る。溝の底部では木片がまとまって検出された。底面はほぼ平坦であるが、南に向かって浅くなっていくため、南側で溝が収束する可能性もある。この遺構からは土師器片や石礫、黒曜石剥片、桃核が出土している。土師器片は、図化が困難な小片であった。

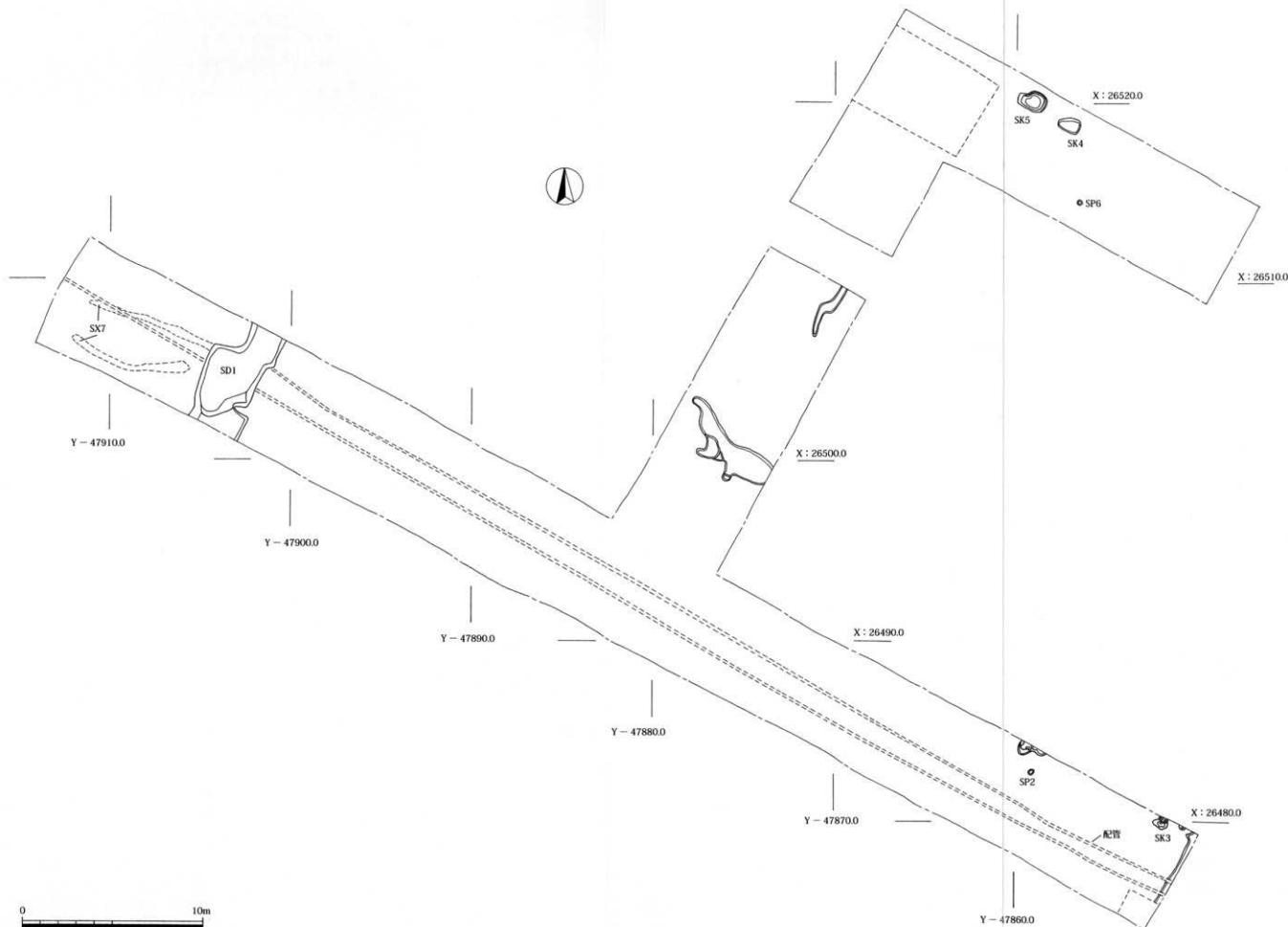


Fig.3 遺構全体図 (1/200)

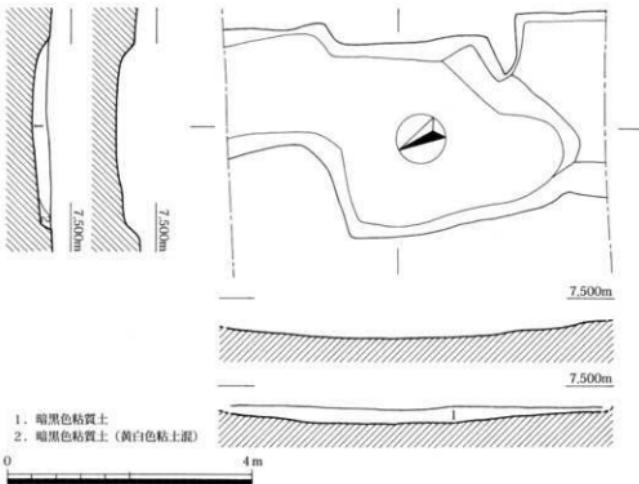


Fig.4 SD1 実測図 (1/80)

ピット

SP2

南側調査区の中央付近で検出された。上面の平均直径は 0.3 m、深さは約 5 cm の浅いピットである。出土遺物は土師器片のみであった。

SP3

調査区のはば東端で検出された。確認される範囲での径は 0.7 m、深さは 0.1 m で、断面は薄い逆凸字形となる。須恵器片、土師器片が出土しているが、いずれも細片であるため図示していない。

SP6

北側調査区の中央付近に位置する、直径 0.3 m、深さ 0.2 m 弱のピットである。土師器細片が出土している。

土坑

SK4(Fig.5、Pla.4)

調査区北側で検出された。平面は楕円形、断面は逆台形を呈する。上面は長軸 1.2 m、短軸 0.6 m を測り、深さは 0.2 m の浅い土坑である。埋土は暗茶褐色土の單一土層であった。

SK5(Fig.5、Pla.5)

SK4 の北西で検出された。平面は不定形で、断面は逆台形を呈する。検出長軸 1.5 m、短軸 1.0 m、深さは 0.4 m を測る。埋土は 2 層に分層でき、淡灰褐色粘質土の上方に淡茶褐色土が切り込む形で堆積している。この土坑からは、須恵器細片、土師器片、磁器片、軽石が出土している。

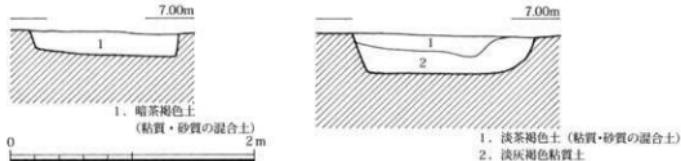


Fig.5 SK4・SK5 土層断面図 (1/40)

不明遺構

SX7(Pla.6)

SD1の西側において、幅0.3m程の不規則な列をなす小ピット群が2本検出された。個々のピットは不定形で、遺物の出土はなかった。

(3) 出土遺物 (Fig.6、Pla.6)

SD1 出土遺物

1) サヌカイト製の打製石器である。完形で、長さ2.4cm、幅1.9cm、厚さ0.3cmを測る。表面はかなり磨耗している。

2) 黒曜石の剥片である。下端部に打欠痕が残る。石材は腰岳産か。

SP2 出土遺物

3) 土師器鍋の口縁部片である。口縁は垂下する玉縁状を呈する。内面には横方向のハケ目調整を施す。内外面とも暗赤茶色で、胎土に角閃石を多く含む。

SK5 出土遺物

4) 口縁が玉縁状を呈する鍋の破片である。内外面とも黄茶色を呈する。胎土には石英を少量含む。

5) 白磁壺の口縁部片である。釉調は緑茶色で、外面では一部赤茶色に発色する。内面下半は露胎である。素地はキメが細かく硬質で、明灰白色を呈する。

6・7) 軽石製品である。6はキメの細かい灰色軽石で、磨耗面を2面有する。法量は長さ3.9cm、幅4.5cm、厚さ1.6cm、重さは5.1gである。7は白色の軽石で、斑晶には角閃石、輝石を含む。両面に刃物痕とみられる溝が残る。長さ4.1cm、幅3.8cm、厚さ2.5cmを測り、重さは8.0gである。

表土及び包含層出土遺物

8) 土錐である。全長3.1cm、直径1.7cmの完形品で、径5mmの穴が貫通する。

9) サヌカイト製の打製石器である。法量は長さ2.0cm、幅1.7cm、厚さ0.4cmで、先端部分を僅かに欠損する。

(4) 小結

SD1 及び SX7 について

本調査における主な遺構としては、SD1が挙げられる。この溝は、検出状態から自然流路を利用したものと考えられる。遺物としては、土師器片や石器が出土しており、遺物の時期は弥生時代～中世と広範囲に亘る。ただし、これらの遺物はすべて同一層からの出土であるため、溝自体の開削、使用時期は特定できない。明治期の字図では畑地となっているため、近世の農地整備の際に埋められた可能性が

高いと思われる。

SX7はいわゆる「波板状凹凸痕」である。この波板状凹凸痕に関しては、道路施工痕跡、重量物運搬の枕木痕、牛馬歩行痕など諸説ある。今回のSX7は道路に伴う遺構ではなく、個々の痕跡が不定形であること、埋土に砂利や礫が混じっていないこと、検出された2条の列が平行ではないこと、水場であるSD1のすぐ横で検出されていることなどから、牛馬歩行痕であると推察される。

SX7が牛馬歩行痕であるとすれば、その位置関係から、SD1は家畜などの水場としても利用されていたと考えられる。検出されたSD1は浅く、調査区の南側では緩やかな段がついているため、牛や馬などの動物が水を飲むには適していたのだろう。

本遺跡は、西牟田氏の創建した靈鷲寺跡の近辺に位置するが、今回の調査では寺院に関連するような遺構や遺物は見られなかった。むしろ、出土遺物は土鍋や軽石製品など日常生活に用いたものが中心であった。中世の集落本体ではないものの、その周辺での人々の営みの一部を垣間見ることができた、というのが今回の調査の成果といえるのではないだろうか。

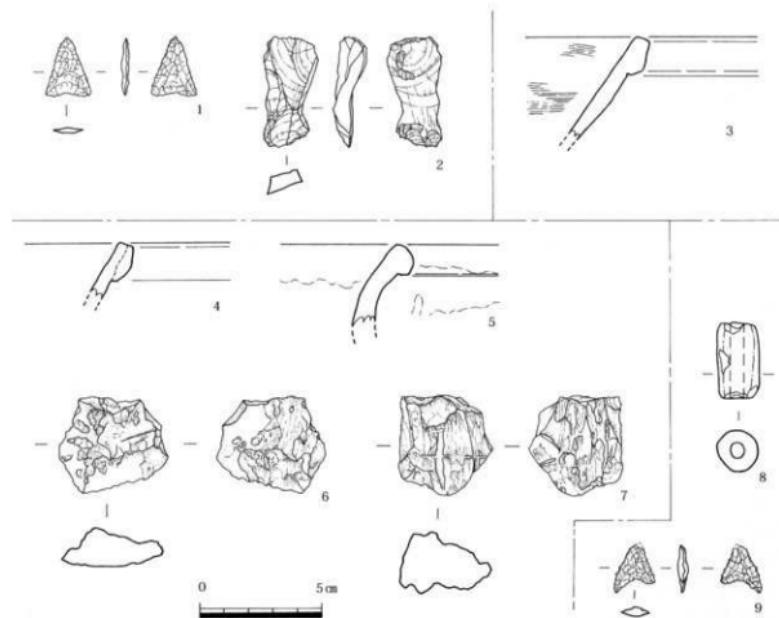


Fig.6 出土遺物実測図 (1/2)

IV. 考察

SK5 出土軽石について

本調査において、SK5 からは 2 点の軽石製品が出土した。また、市内では他に 3 遺跡で 1 点ずつの軽石製品が出土している。本遺跡周辺では軽石は産出しないため、海岸の漂着物を採取したものか、他地域からの搬入があったと考えられる。そこで、本遺跡を含む地域における軽石の入手及び使用状況について、若干の考察を試みたい。

・軽石の入手経路

今回は、筑後川以南の筑後地方を対象として、軽石出土遺跡の集成を行った（→Tab.1: 表中の丸囲み数字は加工痕または使用痕のあるものの数）。また、その分布状況を Fig.7 に示した。対象地域内では、18 遺跡で軽石の出土が確認された。出土数は各遺跡で 1 ~ 2 点程度で、集落に伴う遺構からの出土が大半であった。共伴遺物などから推定した時期は縄文時代～近世と幅広く、軽石製品はある時期に限定されたものではなくて、長期に亘って使用されていた状況が窺える。

また、軽石の主な入手ルートについては、筑後地方の立地環境から

- ①阿蘇・九重など比較的近い火山の噴出物を直接陸路で搬入
- ②有明海の漂着物を採集したものが流通
- ③玄界灘など北部海岸の漂着物を採集したものが南下して流通

という可能性が考えられる。以下、これらの可能性を考慮しつつ、集成結果の検討を行う。

Fig. 7 を見ると、軽石が出土した遺跡は主に対象地の西北に分布している。特に、弥生時代の集落遺跡である柳川市の磯鳥ヶ岳遺跡では、使用痕は認められないものの 33 点と多量の軽石が出土している。この遺跡は近世以前の大規模な干拓が行われる以前の海岸付近に立地しており、漂着物を採集しやすい環境にあったと思われる。また、九重や阿蘇からのルート上である東部の山地付近や南部には殆ど出土例がなく、一部に火砕流堆積物の分布する駿ヶ岳山地付近での出土もごく少数であることから、①の陸路による直接搬入の可能性は低いと考えられる。

③の可能性については今後対象範囲を広げての検討が必要であるが、前述の磯鳥ヶ岳遺跡やその周辺での出土状況を見ると、少なくとも今回の対象範囲の西側に関しては、有明海での採集と考えた方が自然であろう。こうした状況から、本遺跡例を含めた地域出土の軽石は、②の有明海沿岸で採集された漂着物を利用したものと推定される。

九州地方で軽石を産出する火山としては、阿蘇火山、九重火山、姶良カルデラ、桜島火山、阿多カルデラ、鬼界カルデラ、西表海底火山などが挙げられる。有明海に漂着する軽石の経路としては、これらの火山噴出物が海流によって運ばれてきた場合と、河川による運搬の可能性が考えられる。このうち姶良カルデラ～鬼界カルデラまでの鹿児島南端付近の火山噴出物については、黒潮の影響が強く太平洋側に流される確率が高いため、有明海への漂着は考えにくい。また、軽石は偏西風の影響を受けやすく、火山の東側に堆積することが多いため、九重火山についても同様である。有明海で採集される軽石が海流によって運ばれてきたとすれば、阿蘇火山や西表海底火山などの原産地が推定できる。

一方、河川による運搬の可能性も考慮に入れると、軽石の原産地として阿蘇火山の他に九重火山も想定される。ただし、約 7 万年前の阿蘇火山カルデラ形成期に流出した火砕流堆積物 Aso-4 の分布域は広く、星野川左岸の駿ヶ岳山地にも達している。八女市での出土例などは、こうした火山噴出物が川に流されてくる途中で採集されたものかもしれない。

現在のところこれ以上の言及はできないが、素材の科学的な分析と併せれば、原産地から消費地までの運搬ルートを明らかにすることも可能になると思う。

分布図文 文 字 書 号	遺跡名	所在地	遺構	時期(共伴遺物等による)	数量	備考
1	鹿敷森ノ木遺跡	筑後市大字鹿敷	竪穴式住居	弥生	1	浮子
2	江口南村園遺跡	筑後市大字江口	溝	中世～近世	17	
3	中折地内遺跡	筑後市大字中折地	溝	中世	1	浮子か。
4	上庄秀遺跡	みやま市瀬高町上庄	溝	中世～近世?	①	浮子
5	鶴島ツケ遺跡	柳川市三輪町鶴島	土坑	弥生	26②	顯著な葺み/穿孔有
"	"	"	溝	弥生	2③	穿孔?
"	"	"	櫛立柱遺物	弥生	5	
6	東園池大内曲り遺跡	柳川市大字東園池	棟出塗	?	2	
7	酒見貝塚	大川市大字酒見	井戸	弥生	1	浮子
8	津江八升町遺跡	八女市大字津江	溝	弥生	2	
9	アモレ遺跡3地点	八女市大字阿摩瀬	竪穴式住居	縄文	?	
10	城崎遺跡	久留米市安武町安武本	土坑	近世	①	加工品(底丸有)。
11	押方遺跡A地点	久留米市安武町安武本	竪穴式住居	弥生	1	製品。
12	魚屋町遺跡	久留米市城南町	調査区?	近世	①	穿孔
13	筑後国府跡	久留米市吉川町	竪穴式住居	豪良	1	
14	下見遺跡	久留米市糸合川町	溝	平安～中世?	①	
15	西小路遺跡	久留米市糸合川町	包合層	縄文?	①	加工品。
16	碓田遺跡	久留米市御井町一丁目	土坑	弥生～中世	1	
17	野口遺跡	久留米市山川町野口町	土坑	?	1	
18	山川南本村遺跡	久留米市山川町	櫛立柱遺物	古墳	2	

Tab.1 築後地方出土軽石集成



Fig.7 軽石出土遺跡分布図

・軽石の用途

軽石製品は時代を問わず全国的に出土しているが、その加工方法や用途などの研究はあまりなされていないため、個々の遺物に対する詳細な検討も困難なようである。今回集成した軽石の中には穿孔、面取りなどの加工を施したもののが認められるが、その用途については、漁撈用の浮子という以外には具体的な言及がなく、「用途不明」とした報告も多かった。

軽石の様々な用途を考察した一例としては、大賀秀実の関東地方出土資料に対する研究が挙げられる（大賀 1995）。大賀の想定した用途は、

1. 浮子（釣り用、網用）
2. 木製品の加工段階での仕上げ砥石
3. 土器製作において曲面部分を研磨する調整具
4. 有溝軽石を骨角器の製作に供したもの
5. 皮などの製品を仕上げるための滑し道具
6. 金属製刃物用の砥石（断面がV字形や平坦面の研ぎ面のあるもの）
7. 矢柄研磨器（断面がU字形や直径 10mm 弱の円筒形の穴のあるもの）
8. 石製模造品の製作工程での粗い研磨用
9. 金属のロウ付けの際の台石
10. 石偶
11. 容器
12. 装飾品
13. 玉
14. 構築材（窓の構築補強材）
15. 土器胎土混和材

というものである。その他にも、主に南九州で石塔や石棺、地下式横穴の閉塞石として利用される例も指摘されている（角南 2002）。

本遺跡出土の軽石製品 6 は、擦過による磨耗面が 2 面認められる。砥石や研磨用具としての用途が想定されるが、顕著な平坦面や窪みはないため、土器や木製品などの比較的軟質なものに対して使用されたと考えられる。

軽石製品 7 は、断面 V 字形の溝状痕が表面に 1 条、裏面に 2 条認められる。それ以外に擦面などではなく、整形痕も見られない。このことから、金属などの刃先を垂直に立て、砥石として使用したものと考えられる。

6、7 はともに面取りなどの加工や整形は施されておらず、使用痕のみ見られた。入手した軽石の原石をそのまま利用した、簡単な道具だったのだろう。

・まとめ

今回は、筑後地方のみを対象として出土軽石についての検討を行った。軽石製品は弥生時代を中心とし近世まで利用されていたようであるが、出土量に比して研究があまり盛んではなく、その産地や用途など不明な点が多い。今回考察した素材の入手経路や用途についても、更に検討の余地があると思う。

軽石製品はあまり加工されない自然なままの形で出土することが多く、遺物として認識されない場合もある。しかし、軽石は火山のない地域や内陸部にも分布していることから、海岸などで採集物を意図的に持ち込んでいたと考えられる。このことから、軽石が何らかの形で「道具」として使用されていた可能性は高いと思われる。

今後、出土例の増加とその詳細な検討によって、軽石製品についてより多くの情報が明らかになることを期待したい。

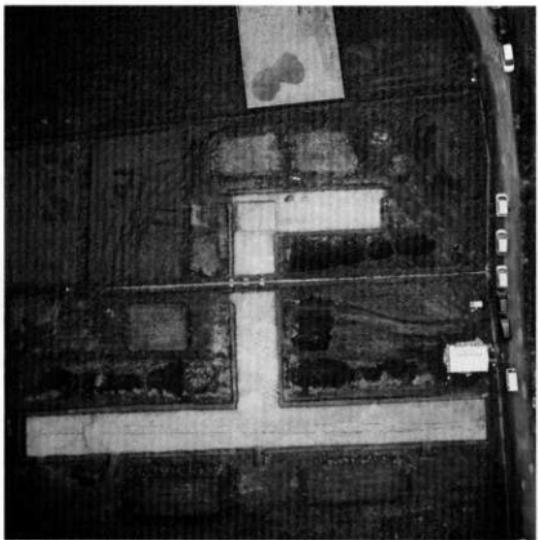
【参考文献】

- 石井忠 1986『灘着物事典』海鳥社
- 大賀秀実 1995「軽石製品について」『高島平北』都立学校遺跡調査会
- 角南聰一郎 2002「中・四国地方出土の軽石」『旧練兵場跡』普通寺市・(財)元興寺文化財研究所編
- 筑後市史編さん委員会編 1998『筑後市史』筑後市
- 日本の地質『九州地方』編集委員会編 1992『日本の地質9 九州地方』共立出版
- 八女市史編さん専門委員会編 1992『八女市史』八女市
- 1: 佐々木隆彦 1990『蔵敷遺跡群 森ノ木遺跡の調査』筑後市教育委員会
- 2: 上村英士 2005『江口南村廻遺跡』筑後市教育委員会
- 3: 立石真二 2004『中折地内栗遺跡』筑後市教育委員会
- 4: 坂元雄紀 2005『上庄秀遺跡』福岡県教育委員会
- 5: 上田龍児 2006『磯鳥フケ遺跡』柳川市教育委員会
- 6: 坂本真一 2007『東浦池大内曲り遺跡』福岡県教育委員会
- 7: 佐々木隆彦 1994『酒見貝塚』大川市教育委員会
- 8: 小田和利・赤崎敏男 2002『津江八升町遺跡(1・2・3次調査)』八女市教育委員会
- 9: 中川寿賀子 1993『八女市南部地区県営圃場整備事業地内埋蔵文化財調査概報4』八女市教育委員会
- 10: 白木守 1996『城崎遺跡 第2次調査』久留米市教育委員会
- 11: 富永直樹 1991『安武地区遺跡群V』久留米市教育委員会
- 12: 水原道範・園井正隆 1997『魚屋町遺跡 第1・2次調査』久留米市教育委員会
- 13: 神保公久・米澤美詠子 2005『筑後国府跡 第205次発掘調査報告』久留米市教育委員会
- 14: 大石昇・富永直樹 1985『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書第4集』久留米市教育委員会
- 15: 白木守他編 2005『平成16年度久留米市内遺跡群』久留米市教育委員会
- 16: 富永直樹・園井正隆 2005『久留米市埋蔵文化財調査集報VII』久留米市教育委員会
- 17: 園井正隆 1992『野口遺跡 第6次発掘調査』久留米市教育委員会
- 18: 神保公久・富永直樹 1999『山川南本村遺跡 第1~4次調査』久留米市教育委員会

写真図版

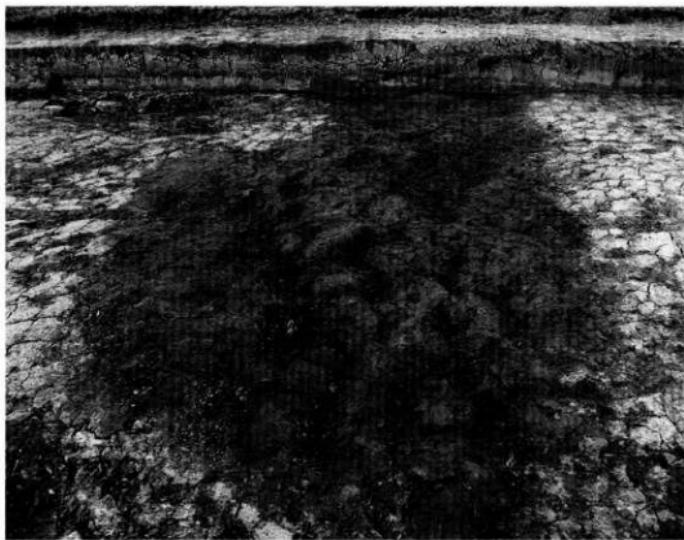


調査区遠景（南上空から）

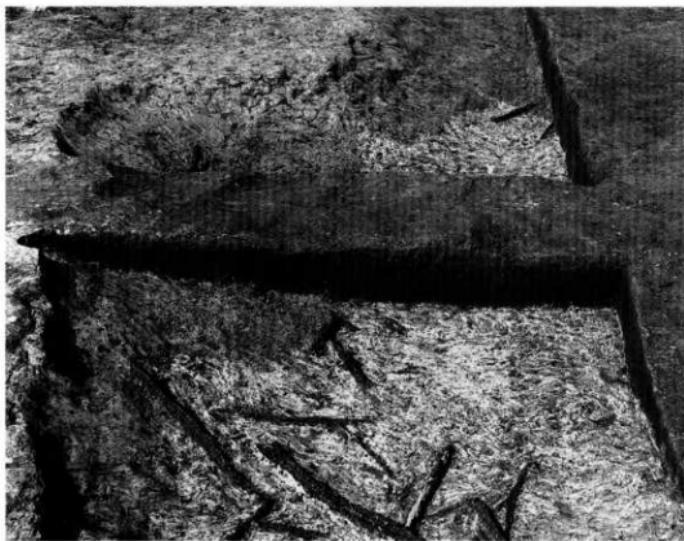


調査区全景（真上から）

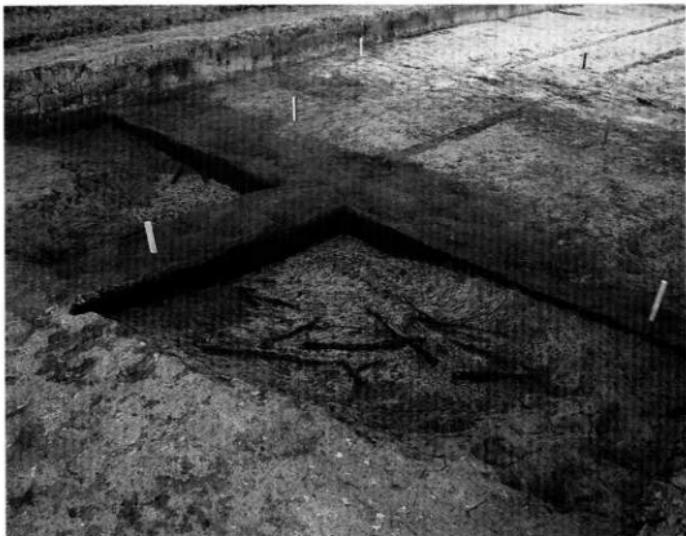
Pla.2



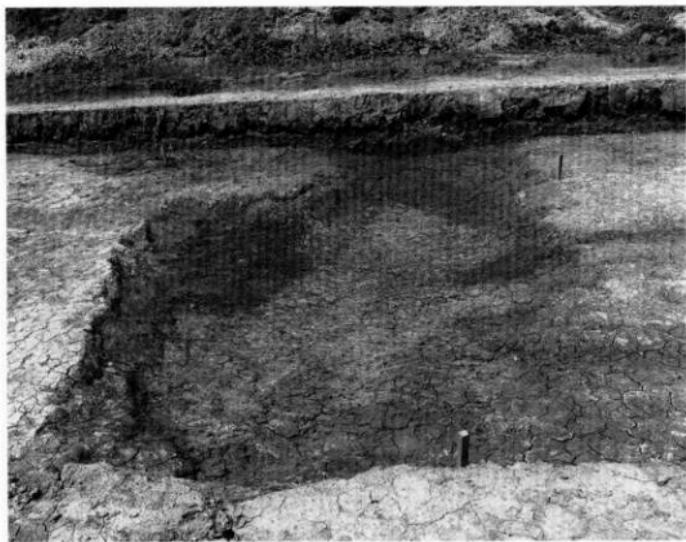
SD1 検出状況（南から）



SD1 土層観察①（北から）

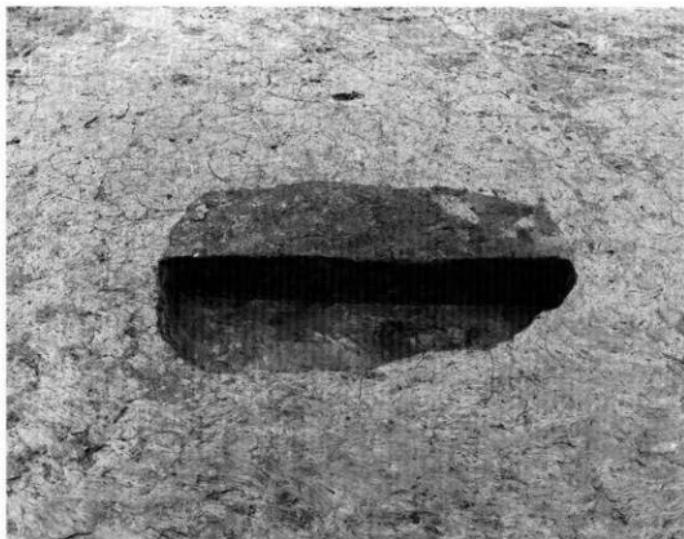


SD1 土層観察②（南西から）



SD1 完掘状況（南から）

Pla.4

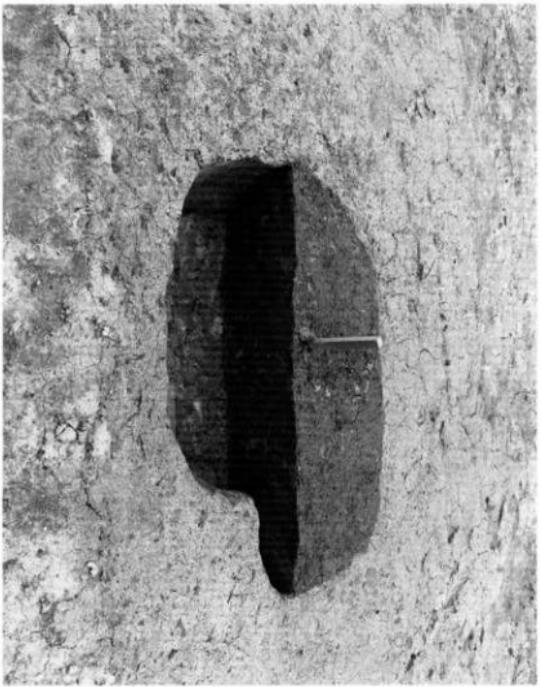


SK4 土層観察（北から）

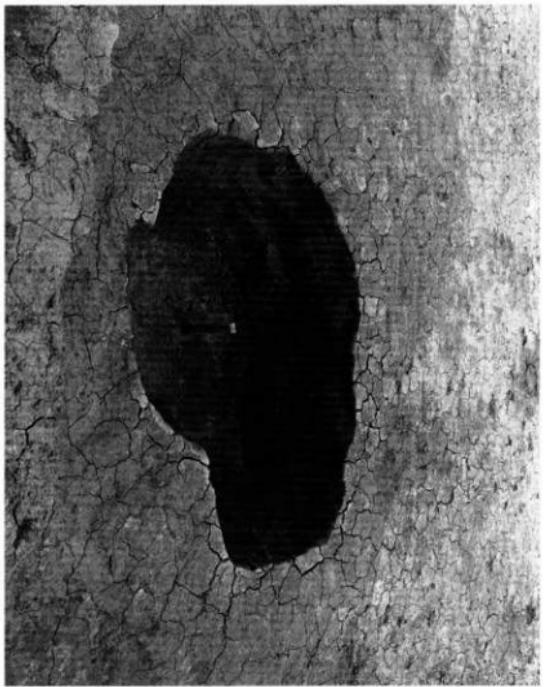


SK4 完掘状況（北から）

Pla5



SK5 土壌観察 (北から)

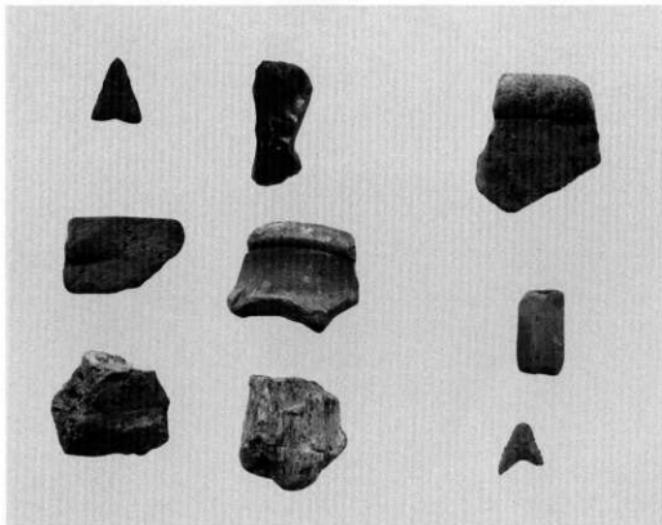


SK5 完整状況 (北から)

Pla.6



SX7 完掘状況（西から）



出土遺物

筑後市文化財調査報告書 第 84 集

西牟田鷺寺東遺跡

平成 20 年 3 月 31 日

発行 筑後市教育委員会

福岡県筑後市大字山ノ井 898

TEL 0942-53-4111

印刷 大同印刷株式会社

佐賀市久保泉町大字上和泉 1848-20

TEL 0952-71-8520 個